

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第144号

イザヤ 65:1

平成19年9月28日

その時、あなたの国（イスラエル）の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。．．． 思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、代々限りなく、星のようになる。ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと探り回ろう。．．． 「この不思議なことは、いつになって終わるのですか。．．． 「それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民の勢力を打ち砕くことが終わったとき、これらすべてのことが成就する。」．．． 「ダニエルよ。行け。このことばは、終わりの時まで、秘められ、封じられているからだ。多くの者は、身を清め、白くし、こうして練られる。悪者どもは悪を行ない、ひとりも悟る者がいない。しかし、思慮深い人々は悟る。．．． あなたは終わりまで歩み、休みに入れ。あなたは時の終わりに、あなたの割り当ての地に立つ。

ダニエル書 12 章

歴史書であり預言書である旧新約両聖書に語られているメシヤ（救い主）に関する多くの預言は、すでにイエス・キリストが御降誕されたことにより成就（実現）しましたが、まだ成就していない預言もたくさんあります。被造物に対する神の計り知れないご計画の全貌が語られている聖書を、神ご自身が語られたことばとして真摯に受け止める者には、人間史の現時点が神のご計画のどのあたりにあるのかを見定めることができます。限られた次元に生きている人間には見えない、しかし、宇宙万物を創造された神の存在を信じ、永遠の真理を求める者であればそれでも、神のことばは預言者ダニエルが告げたように悟ることのできるものなのです。神のときが満ちると、すでに語られていた神の啓示が徐々に明らかになるように、神は預言者たちを通して語ってこられたのでした。そのことは、ヘブル語（旧約）聖書のダニエル書から明らかです。神は預言者ダニエルに「このことばは、終わりの時まで、秘められ、封じられている」と、真理が封じられる期間があり、それまでは神の預言のことばを完全に悟る必要はないことを知らされたのでした。他方で、終末の末期には、神の約束の成就を忍耐強く待ち望み、身を聖く保ち続ける「思慮深い人々」に、真理が明らかにされることを告げられたのでした。

英国の物理、天文、数学者であったアイザック・ニュートン（1642－1727）は聖書の中に秘められている真理をすべて解明しようと努めた一人でした。ニュートンが微積分法、万有引力の法則、光の粒子説等を提唱し、古典力学の基礎を築いた近代科学の確立者であることはあまりにも有名ですが、神の言葉に秘められた真理探求に傾倒した熱心なキリスト信徒であったことはほとんど知られていないようです。

今年6月18日、エルサレムのヘブライ大学のユダヤ国民大学図書館で、ニュートンの聖書研究に関する膨大な遺稿（五十年に亘る四千五百枚もの文書）が展示されたことによって初めてニュートンが聖書注解を残していたことが一般に公開されました。1700年初頭に書かれたこれら貴重な資料は10月15日まで一般公開されるようですが、1936年に競売に出されるまでは、二百五十年もの間、ポーツマスのある伯爵邸でトランクの中に保管されたままになっていたのです。ロンドンで競売に出されて、遺稿の一部は全く世俗的な経済学者ケインズの手に移り、残りはモーセ五書の信憑性を実証することに献身していたユダヤ人東洋学学者アブラハム・シャローム・ヤフダの手に移ったのでした。前者の収集品は後にケンブリッジ大学に移され、ヤフダが保管していたものは、1951年に、新生国家イスラエルに彼が遺言で譲り、1969年には、イスラエルの国立図書館に移されたのでした。しかし一般閲覧は許されず、選ばれた学者しか閲覧できない状態に保管されてきたのでした。このような経路をたどって、ニュートンの貴重な遺稿の聖書注解資料は、今年初めて公の目に触れることになったのでしたが、それはまさに、三百二十年もの間眠らされていた書物の封印がついには解かれたということでした。

ニュートンは1642年12月25日に英国リンカンシャーのウールズソープで生まれましたが、1リットルのなべに入るといわれたくらいの未熟児で、父親はすでに死亡していました。母親はニュートンが四歳のとき教区の六十三歳の裕福な司祭と再婚したため、ニュートンはこの義父が亡くなって母親が郷里に戻ってくるまでの七年余は、母親方の祖母によって育てられました。義父の遺産によって高等教育を受けることができ、ニュートンはケンブリッジ大学に入学しますが、早くも二十六歳で、トリニティ・カレッジの第二代ルーカス数学教授職に就任という才能と幸運に恵まれたスタートを切ったのでした。おそらく義父の残した聖書や神学書に幼い頃から接していたということが、科学と聖書研究の最先端を両刀使いでこなしていく導火線を敷いたのでしょう。英国学士院に自作の反射望遠鏡を送ったり、ライバルの学者ロバート・フックとの光学論争の中で、「プリンシピア」（自然哲学の数学的原理）ほか多くの科学、数学研究文書を刊行したり、「自然神学と宇宙のデザイン」に関する文書を神学者リチャード・ベントレイに送ったり、錬金術に没頭したり、造幣局長に就任したりと多岐に亘って才能を発揮するかたわら、ニュートンのケンブリッジでの後半生のほとんどは聖書研究に費やされたのでした。

「この最も美しい宇宙体系は、高度の知性を持ち、力ある御方の支配の下でこそ、維持されることのできるものである」と語り、自然界こそ神と神の栄光を顕わしていると信じたニュートンは、真理の宝庫である聖書『神の言葉』の中でも、終末に関わる預言を記しているダニエル書とヨハネの黙示録の解読に熱意を燃やし、注解文書を残しました。神学体系の中で、純粋な預言書（神の絶対的な預言能力を証しする書）としてではなく、著名な預言者の“事後預言”によって終末預言の成就の正しさを立証する『黙示文学』という範疇に置かれ、当時ほとんど重視されなかったダニエル書とヨハネの黙示録の解明にニュートンが関心を持ったということは、非常に興味深いことです。預言書や黙示文学を真剣な聖書研究に値するとは認めていなかった英国国教会の教理や方針には賛同できなかったニュートンは、「聖書が包含しているすでに明らかにされた真理体系は、宇宙体系のようだ。まだ普通の人からは封じられているが、時代とともに、その源が神にあることが顕わされてきている」と語り、神が創造された美しい宇宙の法則を探求する一方で、聖書に秘められている真理探求にも全身全霊を投入したのでした。ニュートンにとって科学体系、信仰体系は相反するものでは決してなかったのです。

宇宙にも、聖書にも神の卓越したデザインが反映されていることを時代を先駆けて悟り、その素晴らしさに驚嘆したニュートンは、神の奥義を解明しようと、封じられている暗号発見と解読にも全身全霊を注いだことが知られています。しかし、今でこそコンピューター工学のおかげで、モーセ五書（モーセによって書かれたヘブル語聖書の最初の五書）中心に織り込まれている数知れない『聖書の暗号』を暗号ソフトを用いてだれでも短時間のうちに探し出すことができる時代ですが、ニュートンの時代に暗号を探し出す試みはほとんど不可能で全くの徒労に終わったのでした。しかし、ニュートンが残した遺産、帰納的聖書解釈は、この終末の終わりのときに、多くの人たちの目を開かせるために、神があらかじめ備えておかれたものであったのかもしれない。もっとも、ニュートンは当時のカトリック教会には真っ向から反対し、プロテスタントの側には立っていたのですが、プロテスタントといっても、錬金術に傾倒し、三位一体を受け入れず、キリストの神性を否定するユニテリアンの立場に立っていたようですから、ちょうどユダヤ教徒が、父なる神を理解することができても、父が送られたメシヤ、イエス・キリストをヘブル語聖書が明確に証しているにもかかわらず拒絶したために、父の遠大なる人類救済のご計画の全貌を悟ることができないように、ニュートンの聖書理解にも限界があったようです。

ニュートンは終生の聖書研究を通して、「神の選びの民ユダヤ人はこの世の終わる前には必ず聖地イスラエルへ戻される、すなわち、ユダヤ人への神の約束、メシヤによるイスラエル王国の復興が成就する」とことと「世の終わりは西暦2060年以前には起こらない」という終末に関する預言的洞察を残しました。その根拠は、冒頭に引用したダニエル書の「それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民の勢力を打ち砕くことが終わったとき、これらすべてのことが成就する」から、人間史最後の王国を打ち立てる反キリストの体制が滅び、ユダヤ人の王による神の国が地上に具現するまでを $1 + 2 + 0.5 = 3.5$ 年、さらに、一日を一年とみなして割り出した 1260年（ $3.5 \text{年} \times 360 = 1260$ 日を年とみなす）にありました。ニュートンは歴史をさかのぼり、神聖ローマ帝国が樹立された年を反キリストの体制が始まった年とみなしたのでした。西暦800年、ローマ・カトリック教会と密接に提携したフランク王国のカール大帝が、当時教皇の脅威であった王国や諸国民、また、イスラム教徒を討ち、領土をかつての西ローマ帝国の領土に匹敵するまで

に拡大させたことにより、ときの教皇レオ三世はカール大帝にローマ皇帝の帝冠を授けたのでした。476CEに滅びた西ローマ帝国のゲルマン君主による復興でした。このカール大帝の戴冠により、キリスト教会は、東ローマ皇帝を首長とするギリシャ正教会とローマ教皇を首長とするローマ・カトリック教会とに二分されることになったのでした。

かくして、神聖ローマ帝国が西暦800年に樹立された後1260年を経ると、2060年になりますが、ニュートンにとって神聖ローマ帝国は、ダニエル書7章のダニエルのビジョンに登場する人手によらず打ち立てられる「神の国」が到来する直前の「十本の角から出る一本の角」と表現されている反キリストの体制で、この体制が1260年続くとみなしたのです。1260年という期間は患難期の三年半（「ひと時とふた時と半時」）というわけです。ニュートンの正確な表記では、「『ひと時とふた時と半時の間』は2060年よりも前に終わることはないし、***より後に終わることもない」となっており、後の日付はなぜかブランクのままになっているとのことです。後でブランクを埋めるつもりで忘れ置かれたのかもしれませんが、あるいは、あえてブランクのままに残されたのかもしれないのですが、受難直前と甦り後にもキリストが言われた御言葉「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます」（マタイ24：36）に従えば、ブランクのままが聖書的なのです。実際、「私は、終わりのときがいつになるかを主張しようとしているのではない。そうではなく、予告が外れるたびに聖なる神の預言の威信を落としている好奇心の強いやからが、もうこれ以上終わりのときをいい加減なあてずっぽうでやたらと予言することに止めを刺すためにやっているのだ」と書いたニュートン自身、聖書の預言から日付を割り出すことの愚かしさを百も承知していたのでした。